

燕地域の金属産業集積を支えるものづくり技術の伝承 ～内発的発展の担い手である「職人」に焦点を当てて

根橋玲子¹

A Study of Inheriting the Technology Derived from the Traditional Craftmanship in the “Tsubame” Metal Industries — Focusing on “Artist/Workmanship” Supporting “Regions' Endogenous Development” in the Localized Concentration

Reiko Nebashi

I. はじめに

新潟県燕市は、「金属洋食器のまち」として有名であり、地域の産業集積は、戦後の廉価なステンレス材の加工経験により高い研磨技術を獲得し、日米貿易摩擦やプラザ合意などの荒波を経て、強い産業基盤を築いたとされている。一方で、燕市産業史料館²では、燕産業の起源を江戸時代に勃興した金属加工技術に置き、Made in Tsubame（燕ブランド）が誇るものづくり技術の歴史的説明やパネル展示が行われている。同館の本館では、金属加工の産業集積を育んだ風土・歴史や「職人の技」の説明とともに、作業現場の復元や作業工程の展示のほか、「燕の職人と銘品」として、江戸時代から継承された技術や、鋳起銅器職人、煙管職人、彫金職人等によって制作された、美術工芸品の域に達した作品の紹介がある。また、新館では、江戸時代から続く燕の金属産業史を俯瞰し、和釘から始まり、金属洋食器や金属ハウスウェアを経て、新素材、新技術を活かした金属加工地となった地場産業の変遷を知ることができる。

燕の産業史³によれば、幕府直轄の天領（出雲崎陣屋管轄）であった、江戸時代初期の寛永年間（1624年～1643年）に、江戸から和釘鍛冶が招かれ、農民の副業として神社仏閣用の和釘づくりが奨励されたことが、現在の燕地域の金属加工の集積に繋がっているという。また、江戸時代に、燕に集まった金属加工の職人を中心に加工技術が発展したが、これは、1701年（元禄14年）に、弥彦山麓で間瀬銅山が発掘され、明和年間（1764年～1772年）に銅の精錬工場の稼働が開始したこととも関係が深い。これにより、燕地域には良質な銅が大量に供給され、同地では銅鍛冶も始まった。当時燕では、全国の神社に使われる和釘

¹ 昭和女子大学現代ビジネス研究所 研究員

² 同館は、1973年に燕市が開設した、日本初の「産業史」に焦点を当てた史料館であり、江戸時代から続く燕の金属加工産業の歴史と変遷を、地域内外に広く発信し、次の世代に伝承することを目的としている。

³ 燕の産業史は、燕市産業史料館及び燕市商工振興課公開資料(<https://tsubame-kankou.jp/db/>)等による。

の生産地として鉄の加工が行われていたが、間瀬鉦山の発掘後は、銅器製造が盛んとなったという。また、会津や仙台から煙管や銅器製造の職人が良質な銅材を求めて来訪、燕の職人へ技術伝承を行い、煙管や銅鍋、銅ヤカン、爛つけ鍋等の銅器製造が行われた。

コロナ禍の昨今、先行き不透明な状況において、日本のものづくり産業は、伝統技術や匠の技などの継承問題を抱えている。また、後継者難による中小企業⁴の経営存続が大きな課題となる中で、技術者や職人の採用も厳しい状況に置かれている。根橋（2020）では、こうした地方の産業集積での事象を踏まえて、特定産業が地域集中化に至るプロセスを確認し、産業集積の「担い手」として「企業家」の果たす役割について論じた。一方で、燕地域の産業集積では、江戸時代から金属産業の要素技術が継承され、その技術が進化、発展することで、現在も続く金属加工の産業集積が形成されている。そのため、この金属産業に特化した産業集積を分析する上では、「企業家」のみならず、特定技術を伝承し、現代のニーズに対応する製品や部品へと進化させる「職人」の役割にも光を当てる必要があると考えた。本稿では、地域産業を支える「職人」の存在が産業集積に与えた影響を、先行研究を踏まえて分析し、ケーススタディーにより検証を行った⁵。

II. 先行研究

根橋（2020）では、19世紀のイギリスに見られた特定地域内の産業集積⁶において、ヴェーバー（1904）の定義する「小規模工業生産者」は、プロテスタンティズムの影響を受けたイギリス中産的生産者層である農民や「職人⁷」であるとした。ヴェーバー（1904）は、職人を含む小規模工業生産者の有する合理的産業経営に邁進するエートス（精神・倫理）に着目し、このエートスが隣人愛の実践として商活動が促進され⁸、それによる利潤が発生すると、この資本の蓄積は堅実な産業投資に向かい⁹、初期資本主義形成に至るとした¹⁰。Marshall（1920）もまた、産業集積は、理想的人格を有する自立（律）的な独立労働者や企業家が「担い手」であるとし、外部経済としてスピルオーバーする「地域特化産業」の

⁴ 中小企業の定義は、中小企業基本法による。（製造業：資本金3億円以下、従業員300人以下等）

⁵ 本稿は現代ビジネス研究所2020年度採択プロジェクト（学生メンバー：食安全マネジメント学科4年矢倉有莉さん、現代教養学科4年近藤菜々子さん、国際学科3年黒保奈那さん、グローバルビジネス学科丸岡梨湖さん、指導：磯野彰彦教授）におけるインタビュー調査の成果であり、ご協力頂いた皆様に御礼申し上げます。

⁶ Marshall(1960)は、馬場訳(1966)では、19世紀中期の英国マンチェスター地域等、特定地域内の小規模製造業の集積を「地域特化産業 (a localized industry)」とされている。本稿では集積 (agglomeration、ヴェーバー、A. (1909)『諸工業の立地について』に詳しい) の議論は見ない。

⁷ デミウルゴスは、ギリシア語で「職人・工匠」の意味である。プラトンが神話的説話を通じて物質的世界の説明を行うために使った言葉であり、これはグノーシス主義にて援用され、物質世界の創造者であり「造物主」を指した。

⁸ ヴェーバー（1989）は、「資本主義の精神」から「金儲け」を除いた中核のエートス（精神）を「世俗的禁欲」と定義し、プロテスタンティズムの倫理から生み出されたと考えた。

⁹ 18世紀中産的生産者は投機的貿易へ誘惑が多く、資本主義の精神は産業投資を内面から推奨するエートスだった。

¹⁰ ヴェーバー（1904）による。一方で、大塚（2001）では、ヴェーバー（1904）では「隣人愛」より「利潤」に目的を置く場合、「私的所有の拡大により最終的に共同体が解体」し、「資本主義の精神」が凋落するとの指摘があるとしている。

集積内に、局地的熟練労働市場¹¹と、「職人」を含む小規模事業者の「分業」を見出した¹²。

一方で、制度学派¹³とされる Veblen (1904)¹⁴は、産業発展に必要な機械技術や物質科学を追究するには、企業運営は「製作本能 (The Instincts of Worksmanship)」を持つ技術者が行うべきと考えた¹⁵。また、Veblen (1914) は、「The Instincts of Worksmanship (職人技本能¹⁶)」に着目し、産業技術の発展には、「職人技本能」が不可欠であり、技術発展段階では、「職人技本能」への Contamination (汚染、混入) が有効に作用するとした。しかし、資本家が企業運営を行う機械工業化段階では、「思考習慣」は、「金銭的原理」を重視するため、「自己汚染 (Self-Contamination)」により、金銭的文化が職人技の進展を妨げる。また、金銭的文化は、人間精神の最も内心に侵入し、職人技感覚を最初の動きから汚染するとした。

一方で、地域産業集積研究では、企業間取引関係やネットワークに注目した Piore and Sabel (1984)、そして、産業集積を「ある特定の分野に属し、相互に関連した、企業と機関からなる地理的に近接した集団」¹⁷と定義し、強いクラスターが地域の経済発展や地域活性化に有効とする Porter (1990) があり、特に Porter (1998) では、地域クラスターの企業間紐帯としての行政・支援機関の役割やクラスター間連携・広域化を重視した¹⁸。また、地域クラスター論に基づく地域産業システムを提唱した Saxenian (1994,2007)¹⁹は、地域の経済的関係のほか、制度的・社会的関係²⁰にも着目、知識のスピルオーバーにより外部経済と内部経済の境界が曖昧となり企業の技術が接続する、地域産業システムのダイナミズム形成を論じた²¹。

¹¹ 渡辺(2011) は、「社外の熟練労働者を即戦力として雇用」し、「零細企業に請負わせる」等の調査結果も得た。

¹² Marshall(1923)は、経済社会の「担い手」の人間性にも着目し、成功した企業家に選ばれし者の義務として公共への奉仕を求める「経済騎士道」を提唱した。

¹³ Veblen(1899)は、経済分析を行う上でも、制度や文化的な背景の影響を排除できないとした。

¹⁴ Veblen(1899)では、①金銭的制度 (略奪的習性) と②産業的制度 (製作者本能や生産と関連をもつ) に分け、前者を企業 (business) に、後者を産業 (industry) に関連するものとした。

¹⁵ Veblen(1904)は、人間の本能のうち「製作本能」は、社会福祉増進を目的とした「労働」を生み出し、生産の効率化を指向する本能であり、この本能の反映が「産業」であるとした。もう一方の本能は「略奪 (攻撃) 本能」であり、獲得や見栄などを指向する野蛮な本能であり、この本能の反映が「企業」であるとした。そのため、産業の担い手を「技術者」、企業の担い手を「企業家」とし、企業家の動機や目的は「利潤追求」に置かれると考えた。

¹⁶ Veblen が着眼した「The Instincts of Worksmanship」については、翻訳者により訳出が異なる。ここでは、松尾博訳 (1997)『ヴェブレン経済的文明論：職人技本能と産業技術の発展』の「職人技本能」を採用する。

¹⁷ Marshall(1920)の集積論を批判した Porter (1990) は、米国の大企業を例にした集積内のイノベーションを軸にした、地域クラスター (regional cluster) 理論を構築し、産業集積立地企業の競争優位性を論じた。

¹⁸ Porter (1998) では、政策による支援対象となる産業を限定せず、広域クラスター支援を行うべきとし、信頼感等が形成された社会関係資本 (social capital) も重視している。

¹⁹ Saxenian (1994)は、垂直統合企業の集積地「ルート 128」とシリコンバレーの比較調査を行った。

²⁰ Saxenian(1994)では、「制度的関係」を企業組織内の階層構造や役割・責任分担等、「社会的関係」を地域内の交流を通じた共通の理解・慣行、労働市場のビヘイビア、リスク許容度等の文化等としている。

²¹ Saxenian(2007)は、地域産業における「オープンイノベーション」の可能性を示唆した。

日本における地域産業の集積研究では、山崎²² (1977) の地場産業集積の調査があり、長期存続する 5 つの地場産業について分析が行われた²³。機械製造業や金属加工業の下請取引関係にある中小・零細企業を調査し理論化を行った渡辺 (1997)²⁴は、産業集積内での「集積の利益」を得られない小規模企業²⁵の存在を指摘した。伊丹・松島・橘川 (1998) は、世界の産業集積²⁶との比較により地域クラスターを理論化、イノベーションの可能性を見出した。さらに、企業立地促進法²⁷ (2007 年) 制定により、日本の産業集積政策は、新産業分野の振興や、広域クラスター連携等を中心に議論が行われ、支援機関の役割が重視されてきた²⁸。

一方で、産業の「担い手」としての小規模事業主に注目した Penrose²⁹ (1959) は、経済が成長していれば、経済の間隙 (interstices) は小企業を存続させるとし³⁰、企業家精神に富んだ企業家 (entrepreneur) の意思決定が働きかけた需要が事業機会となり³¹、その機会実現のため企業が成立するとした。また、大塚 (1956) は、ヴェーバー (1904) が産業資本誕生の基盤³²とした農村工業にみられる共同体内分業が、中世ヨーロッパ農村部の「ゲルマン的」共同体³³に存在することを明らかにし、その共同体の主要成員である小規模工業生

²² Marshall(1920)の小規模企業による社会的分業を軸に、地場産業での外部経済の利点が説明された。

²³ 山崎(1977)は、産業集積が長期存続する理由として、①規模の経済性の欠如、②生産工程の技術的な分離可能性、③低賃金労働力の存在、④小資本による社会的分業体制が存在し新規参入が容易、⑤社会的分業体制が緩衝機能をもつ、⑥外部経済が存在し立地メリットが向上、⑦社会的分業体制の持つ弾力性がニーズに対応という 7 つを示した。

²⁴ 渡辺(1997)は、社会的分業構造と競争から下請制研究の論理的枠組を提示、中小企業研究に重要な視座を提起した。

²⁵ 渡辺(1997)は、大手企業と下請取引関係の中小企業調査であり、中小企業が産業集積内に潤沢な社会資本を有し、主体的に需要変動を分析し、外注先の組織化・生産管理・工程管理等の分業を行うとは想定しない。

²⁶ Piore and Sabel (1984) のイタリア手工業者クラスターやシリコンバレー等との比較研究を行った。

²⁷ 「企業立地の促進等による地域における産業集積の形成及び活性化に関する法律」の略称であり、2017 年まで施行された。過去の産業クラスター政策を引き継ぎ、国際競争力のある産業集積地を育成、地域経済を活性化することを目的とした。政府は支援する自治体像として、「地域の強みと特性を踏まえ、基幹産業の高度化を目指す産業集積地」を掲げていた。

²⁸ 日本の産業クラスター政策は①地理的利益と峻別した集積の利益分析、②他企業呼び寄せのための外部経済分析、③外部経済が発生・存続するための条件等、ポーターやサクセニアン理論を踏まえている。

²⁹ Penrose(1959)は、経営者資源に注目し、現場の技術、スキル、ノウハウ等の未利用資源の有効活用が企業成長に繋がると論じた。これは内部資源論 (RBV) の源流とされており、優位な資源は企業の成長に結びつけられるとした。

³⁰ Penrose (1959)は、企業成長の可能性を成長の経済とし、大企業は一定期間の拡張量や成長率に限界があるため、経済成長率が高いと大企業が参入し難い市場が生まれ小企業が存続するとし、産業政策や中小企業政策に影響を与えた。

³¹ Penrose(1959)は、成長する企業には企業家精神 (enterprise) が備わっており、事業機会を探索するための現場の知識を、スキルやノウハウ等の行動知であり、従来の知識観では扱えない「暗黙的な知識 (tacit knowing)」とした。

³² 大塚(1956)は、「貨幣経済」と「商人」の活躍は資本主義と関係なく世界史上あらゆる時代と地域に見られ、マルクス「資本論」では、労働による剰余価値生産が伴わない商業・高利貸資本を区別している。

³³ マルクス(1959)は、「共同体」の発展諸段階として、「アジア的形態」、「古典古代的形態」、「ゲルマン的形態」の三形態を挙げ、「ゲルマン的」共同体の生産力向上が生産関係の矛盾を生むと、共同体が変容していくとした。

産者³⁴を、マルクス（1959）のいう「担い手」の前提とした。さらに大塚（1956）は、マルクス（1959）の資本主義観を批判し、資本家による「収奪」は、自営的な労働者が「担い手」の場合には起きないとした³⁵。そして、独立自営のヨーマン³⁶を産業の「担い手」の規範とした「大塚史学」に影響を受け、経済変化に適応する中小企業像を示した清成（1970）は、シュンペーター（1998）の編訳を行い、「産業の担い手」として「企業家³⁷」に焦点を当てた。

根橋（2000）では、燕三条地域の事例研究において、産業集積を内発的に支える「企業家」の存在を認めたが、地域の産業集積の「担い手」を「職人」に求める研究は多くはない。網野（2003）によれば、江戸時代には「手工業者」を指す言葉として「職人」が広く用いられていたが、8世紀末建立の「東寺」の記録書『東寺執行日記』³⁸の貞治三年（1364）四月条には既に「職人」の記述があり、日本の中世の「百姓」は農業民だけでなく、製塩民、製鉄民など「職人」も含まれるとした³⁹。律令体制下の日本では、「職人」である「職能民」の組織化⁴⁰とともに、「職能官人」⁴¹が採用され、「職能」の育成、伝習が行われた。9世紀～10世紀頃には、官庁における特定氏族（礼家、薬家、法家、暦家等）による世襲が「職能」の原型となり、11世紀～12世紀には、小槻氏（算道）と主税・主計寮、中原・清原氏（明経道）と外記局、丹波・和気氏（医道）と典薬寮など、「職能」を家業とした氏族が官司を世襲した。

伝統産地の産業史と職人についての研究としては、山田（2013）が、陶磁器産地の協働の仕組みを、歴史的経緯から考察し、陶磁器職人等へのインタビューを通じ、地域産業集積を企業家活動の視点から分析している。また、原田（2000）は、燕の産業史を俯瞰した上で、燕地域の産業集積における技術革新や自己組織化のダイナミズムを論じた。

³⁴ 大塚(1977)は、小規模工業生産者を、資本家と労働者の特性を併せ持つ、伝統主義から脱却した経済人とし、ダニエル・デフォー『ロビンソン漂流記』主人公のように合理的思考・行動様式を持つ「ロビンソンの人間類型」に置いた。

³⁵ 「資本論」(1969)第24章「いわゆる本源的蓄積」による。資本主義的生産様式が自走した結果労働の社会化が起き、労働者がプロレタリアに、労働諸条件が資本に転化され、生産手段が社会的に利用され、私有者(労働者)を搾取する資本家による「収奪」が起こるとした。

³⁶ 内村鑑三に師事した大塚は、1930年代ヨーロッパの小生産者的発展を軸として資本主義が成立したとし、イギリス近代民主主義に繋がる産業発展を、独立自営農民ヨーマンが支えたとした。

³⁷ 企業家の資質として① 不測の状況でも行動し、② 新しいことに反抗し慣習に戻る人に立ち向かい、③ 社会環境からの抵抗(法律や政治的妨害等)を乗り越える、強いリーダーシップが必要と述べた。

³⁸ 網野(2003)によれば、「東寺執行日記」(1330年～1751年)には、貞治三年(1364)四月十四日条「当寺番匠(ばんじょう)、鍛冶、大仏師、暈差以下職人」とあるという。

³⁹ 網野(2003)によれば、桑による養蚕、糸・綿・絹の生産、漆を用いた漆器の製作、柿の果実、さらに柿しぶの利用、搗栗(かちぐり)を堅果のほか材木として活用する等、地域資源を活用した加工品製造は、主に地域産業が担っていた。これは、中世には既に日本全域で各地域住民が、1500年に亘る加工技術の蓄積を有していたことを意味する。

⁴⁰ 網野(2003)によれば、当初は品部(しなべ)、雑戸(ざつこ)、雑供戸(ざつっこ)等の官司として組織されたが、その後、天皇家直属の供御人(くごにん)、神人(じにん)などの職能民が登場する。

⁴¹ 網野(2003)によれば、染師、挑文師(あやのし)、画師、典革(てんかく)、太宰大工(だざいだいく)等の職能官人は、多くが天皇直属の舎人の称号を持った。一方、中国では春秋時代から「士農工商」の四民分業が形成されていた。

III. リサーチクエスチョン

大塚（2000）によれば、ヴェーバー（1904）が定義する「ゲルマン的」形態の共同体は他の共同体諸形態に比べ生産力が高く⁴²、ゲルマン的形態の農業共同体の内部には、初めから一定の種類の「手工業者」が包含されていた。根橋（2020）では、江戸時代より農民による燕和釘鍛冶集団が存在し、当時の金属加工技術が継承されているため、燕地域は「ゲルマン的」形態の手工業者が含まれる「共同体」であるとの仮説を立てた。そして、Marshall（1920）にならい、産業集積を「特定の地区に同種の小企業が多数立地していること」と定義し、中小規模企業の産業集積群のうち、ヴェーバー（1904）や大塚（2000）が想定した「共同体」の要件を参考に、燕三条の産業集積に内発的発展⁴³を促す『担い手』＝『企業家』の存在を明らかにした。

多くの産業集積研究では、Piore and Sabel（1984）の「インパナトーレ（連携コーディネータ）」の重要性が指摘され、取引関係論やネットワーク理論（Glanovetta,1973 等）で着目される「ネットワーカー」や「コーディネータ」⁴⁴の重要性を強調した帰結が多い。しかしながら、燕の産業集積が「ゲルマン的」共同体である⁴⁵ならば、Marshall やヴェーバー、大塚、シュンペーター、清成の先行研究で示された「産業の担い手」として、「企業家」に加え、産業集積を支える技術を伝承する「職人」にこそ焦点を当てるべきであろう。

本稿では、燕地域の金属加工の産業集積において、江戸時代から継承される金属加工技術を有する「職人」に着目し、産業集積形成の「担い手」という視点で光を当てたい。

IV. 研究方法

燕地域のような金属産業に特化した産業集積を分析する上では、根橋（2020）で論じた、産業集積形成における「企業家」の重要性のみならず、特定技術を伝承し、現代のニーズに対応する製品や部品へと進化させる「職人」が、産業集積の発展、存続に何らかの影響を与えたのではないかという仮説を立てた。

本稿では 2017 年～2020 年に実施した、燕三条地域の中小企業 50 社へのインタビュー⁴⁶の結果から、先行研究から導き出された前項のリサーチクエスチョンを踏まえ、企業家の事例を定性的に分析する。調査手法については、社会調査の手法の一つであるインタビュ

⁴² ヴェーバー(1904)は、産業集積は自給自足の自然経済からの派生でなく、最初からある範囲の局地内的商品交換を伴い、局地的「貨幣経済」により補充された共同体であったとした。

⁴³ 鶴見(1996)による。鶴見は、国学や地方学（南方熊楠、柳田国男等）の影響を受け、地域の「内発的発展（Endogenous Development）」の概念を提唱した。ここでは産業集積の「担い手」が中心となる、集積における「内発的発展」に限定する。

⁴⁴ 河藤(2011)による燕三条地域の研究でも、コーディネータ機能が重視されている。

⁴⁵ 大塚（2000）では、「わが国の封建社会の基礎過程を形づくる「共同体」について、もし中世ヨーロッパの「共同体」と同一の基本的特質が実証されうるとすれば、それも「ゲルマン的形態」とよんで一向さしつかえない」とした。

⁴⁶ 本稿執筆は、燕市産業振興部商工振興課課長補佐山崎聡子氏、燕市産業史料館主任学芸員齋藤優介氏、公益財団法人つばめいと代表理事山後春信氏及び専務理事若林悦子氏に多大なご協力を頂いた。この場を借りて御礼申し上げる。

一調査を採用し、オープンクエスチョン方式⁴⁷による質的調査を行った。但し、インタビュー依頼時には、簡単なクエスチョネアを送付しており、質問項目は下記の通りである。

①この仕事に入るきっかけ。②この仕事を行って、また作品を作っていて、最も感動したこと、嬉しかったこと。③これまで仕事上で最も辛かった事や時期とその理由。④「仕事」に対する考え方や「天職⁴⁸」についてお考えがあれば。

なお、中小・小規模企業は、企業家の意思決定が直接経営判断に反映されるが、特に金属加工業者については、技術の発展・継承を担う「職人」の存在が鍵となるため、インタビュー結果の定性的分析は適切であると考えられる。

V. 事例研究

1. 「金工技法」と玉川堂株式会社の事例⁴⁹

燕地域では、金属洋食器と共に、金属ハウスウェアの出荷数が日本一であるが、この金属ハウスウェアの製造技術は、江戸時代に始まった「鋸起銅器」製造の金工技法が発祥とされる。鋸起銅器は、銅板を金鋸で打ち起こし打ち縮めて成形する鍛金技術を用いた器である⁵⁰。戦後は、アルミ製品やステンレス製品の普及により、燕地域でも大量生産品が多く製造されるが、この銅器製造の工法は、美術工芸品を製造する技術として継承されている。前出の燕市産業史料館本館では、鋸起銅器の作業場や職人が実際に使用し、工房で使われた道具が復元され、「銀銅二重口打出湯沸」（玉川堂 5 代目玉川覚平氏作）も展示されている。「口打出（くちうちだし）」は、本体と注ぎ口を銅板から継ぎ目なく打ち出す技術であり、現在も玉川堂の優れた技術として伝承されている。

玉川堂の鋸起銅器は、独自の金工技法だけでなく、色合いの美しさも特色である。特殊な表面処理技術により、素銅色、紫金色、銀色などが表現される。銅器の表面に、溶かした錫を塗って焼くと、銅と錫の合金ができるため、硫化カリウムを反応させ、表面処理を行い黒色化した表面を研磨する。その後、緑青（銅のサビ成分）を溶かした色水で煮込むと、風合いがある銅器になると言う。燕市産業史料館所蔵の、玉川堂の「鋸起銅器」コレクションでは、間瀬銅山で産出され、緋色が美しく品質も優れている銅⁵¹で製造された「花瓶古代瓦金銀象嵌」（玉川堂 4 代目玉川覚平氏作）が展示されている。

「打つ。時を打つ。」をコーポレート・スローガンとしている、株式会社玉川堂（以下、玉川堂）は、銅板を鋸（かなづち）で叩き起こす製造方法による「鋸起銅器」の伝統技術を継承する企業であり、1816 年当時 17 歳であった初代玉川覚兵衛氏（1799 年～1872 年）

⁴⁷ オープンクエスチョン方式を採用した理由としては、工場や工房などの現場で働く「職人」の方の手を止めず、極力負担のない対話型によるインタビューの形が望ましいと考えたからである。

⁴⁸ 「天職」については、ヴェーバー（1989）の定義による。

⁴⁹ 2020 年 11 月 25 日付株式会社玉川堂匠長玉川達士氏及び番頭山田立氏へのインタビューによる。

⁵⁰ 長い年月をかけて継承されたノウハウや技術を元に、職人が頭の中でイメージし、それが銅器の設計図となる。

⁵¹ 元禄年間（1688 年～1704 年）に、弥彦山麓の間瀬村で開かれた間瀬銅山からは、良質な「緋色銅」の採掘が行われたという。

が、新潟県燕市にて創業した。玉川堂の鎚起金工法は、1768 年（明和 5 年）に燕へ移住し、当地で鍋、釜、金たらい等を製造した、奥州出身の銅器職人の藤七が伝えたといわれる。

二代目覚次郎氏（1829 年～1891 年）の代より美術工芸品の製作が開始されたが、三代目覚平氏（1853 年～1922 年）の時代には、廃刀令によりお役御免となった刀剣付属品の彫金師を雇い、日常銅器から美術工芸品までを制作した。1873 年（明治 6 年）日本が初めて万国博に参加したウィーン（オーストリア）万国博出品以降、玉川堂の鎚起銅器は、国内外の博覧会に出品し、様々な賞を受賞した。当時はジャポニスム⁵²という日本ブームの最中であり、同社製品は「美術工芸品」として海外でも人気を博した。そのため、玉川堂は、明治政府の輸出奨励策もあり、こうした海外博覧会等を通じて、150 年以上にわたって、海外市場に輸出を行ってきた。

四代目覚平氏（1881 年～1947 年）は、帝室技芸員海野勝珉に彫金を学び、さらに、東京美術学校（現在の東京芸術大学）彫金科に入学した。玉川堂に入社後、四代目覚平は鎚起金工法への彫金の応用や「口打出」技法を開発し、美術工芸品としての発展を遂げた。

また、五代目覚平氏（1901 年～1992 年）は、1930 年、横浜市の後援のもとに横浜分工場を設立して製品を多様化し、都内デパートへの製品販売を開始した。玉川堂は 200 年間で 300 人以上の鎚起職人を輩出し、鎚起銅器の礎を築いた。玉川堂は、今も銅器製造業を牽引し、変わらぬ技法で製造を行っており、この伝統技術は、1958 年に新潟県より「新潟県無形文化財」、1980 年に文化庁より「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に認定された。

さらに、1981 年に、六代目玉川政男氏は、「燕・分水銅器協同組合」を設立。同年 6 月には、通商産業大臣より「伝統的工芸品」の指定を受けた。

そして、七代目当主である玉川基行氏は、問屋を通じて行ってきた製品販売を、顧客ニーズをいち早く把握できるダイレクトセールス方式に変えた。具体的には、同社は販売や小売事業に力を注ぎ、燕と東京（銀座）に直営店舗を運営している。コロナ以前には、個人顧客の約 3 割は外国人及びインバウンド顧客であり、日本にいながらのグローバルニーズの把握に成功していた。さらに基行氏は、燕地域のオープンファクトリー化の推進を行い、「燕を国際産業観光都市に」という目標を掲げ、産業観光を推進したい意向を持っている。このように、その製品の美術的、品質的価値に対し、国内外から高い評価を受けている玉川堂は、鎚起銅器の技術伝承のみならず、燕地域の金属産業発展のため、日夜尽力している。

燕市産業史料館には、玉川堂五代目覚平氏の次男で、2010 年に重要無形文化財保持者（人間国宝）と認定された、玉川宣夫⁵³氏（以下、宣夫氏）作の「木目金（もくめがね）花瓶」も展示されている。鍛金技法の中でも特に難易度の高い「木目金」は、金属の色の違いを

⁵² 19 世紀後半～20 世紀初頭、日本の美術工芸品が、西洋の美術・工芸・装飾等の幅広い分野に影響を与えた現象。欧州での万国博覧会等を通じて、陶磁器や漆器、調度品、浮世絵等の美術工芸品が輸出され、日本ブームが到来した。

⁵³ 宣夫氏は、現在は玉川堂を退社し、独立して制作活動に専念している。

利用して、複雑な木目模様を作り出す特殊加工技術である。「木目金」は、銀・赤銅・銅などの異種金属を 10～30 枚程度積層して板状に延ばし、表面を削って模様を作っている。

宣夫氏は玉川堂に入社後、上京して 2 年間、関谷四郎氏に内弟子として学んだが、木目金技術に通じる鍛金技法の基礎は、燕の職人たちから学んだ技が礎となっているという。この木目金技術は、宣夫氏から玉川堂匠長の玉川達士氏（宣夫氏のご子息）に受け継がれている。また、達士氏のご子息も、玉川堂で職人として製作を行っており、木目金技術は次世代へと継承されるだろう。また、玉川堂では「職人」が作業に集中できる空間設計が重視されており、美大や芸大を卒業した若手職人が多数育成されており、江戸時代からの伝承技術を未来に繋げている。

2. 「研磨技術」と燕市フィギュアスケートブレード開発研究会の事例⁵⁴

燕の金属加工産業では、切削・プレス・溶接・研磨などの加工工程を複数の企業が分担し、一つの製品を製造する。燕地域の伝統産業である研磨加工は、「磨き」と言われる金属加工の最終工程に使われる重要な技術である。江戸時代には、和釘や鍍起銅器のほか、鋸前、鋸の目立てに用いる鉦（ヤスリ）、江戸からの注文に応える煙管（キセル）、携帯用の筆記用具である矢立（ヤタテ）も生産されたが、煙管の仕上げ工程に使われたのが「磨き」の技術であった。燕に煙管製造の技術が伝わったのは、明和年間⁵⁵（1764～72）や安永年間⁵⁶（1772～81）とされ、煙管の製造が始まった⁵⁷江戸時代後期には、燕は煙管の一大産地であった。それに伴い「磨き屋」が専門化、後の金属洋食器等の仕上工程に、研磨職人が活躍した⁵⁸。

燕市では 2007 年に、世界に誇る研磨技術⁵⁹を未来へ伝承するべく「燕市磨き屋一番館」を設立、「にいがた県央マイスター」に認定された高度熟練技術者が、未来の職人となる研修生の育成を行う。その他、燕地域には「磨き屋シンジケート（燕商工会議所内）」などの磨き屋グループも存在し、後継技術者となる「職人」の育成や若手人材育成等の活動も行っている。こうしたグループは、市や商工会議所、外郭団体とも連携体制を持ち、取り纏め企業（幹事企業）の組織や経営者の域内外のネットワークにより、新産業育成や共同受注も行う。

また、燕に伝承される研磨技術を活用した新たな取り組みに、フィギュアスケートのブレード開発を行う「燕市フィギュアスケートブレード開発研究会」がある。同研究会は、燕市産業振興部商工振興課を事務局として、燕の金属加工技術で、世界を目指すフィギュ

⁵⁴ 2019 年 9 月 24 日燕市役所産業振興部佐藤雅之主任、有限会社徳吉工業代表取締役徳吉淳氏のヒアリングによる。

⁵⁵ 燕在住のかざり職人星野玄司氏が、江戸で「住吉張り煙管」の製造を習得し、燕で煙管を作った。

⁵⁶ 1776 年（安永 5 年）、会津若松出身のかざり職人鏝屋市右衛門が、「村田張り煙管」の製造を、燕の青山藤七に伝授した。

⁵⁷ 星野の住吉張りと青山の村田張りの 2 つの技法が競い合い、煙管が広く作られるようになった。

⁵⁸ 下町ロケット x 燕市特設 HP (<https://www.city.tsubame.niigata.jp/section/rocket/index.html>) による。

⁵⁹ 米国アップル社の携帯型音楽プレイヤー iPod の裏面を高い精度で磨き上げたのが、燕の研磨職人であった。

アスケートのブレード開発を目的とし、フィギュアスケートのブレードに必要な「軽量化」と「強度」のバランスを、燕企業の技術力で検討し、高品質のブレード開発を行った。研究会代表の徳吉淳氏によれば、現在のフィギュアスケートのブレードは海外製品（英国、米国、カナダ製等）が中心で、国内専門家は海外製品の品質に決して満足をしてはいなかった。日本のオリンピック出場選手がブレードの不具合に苦労しており、問題解決のため研究会を立ち上げたという。本研究会では、燕の金属加工技術とノウハウ（鋼材調達、レーザー切断加工、バレル研磨、熱処理、溶接、エッジ研ぎ出し等）を駆使して、高品質のブレードを開発・供給するべく、2017年7月から勉強会をスタートしたという。そして、国際スケート連盟技術認定員の岡崎真氏、元新潟県スケート連盟所属の今井遥氏、新潟県スケート連盟理事長の伝井達氏をはじめ、多くのスケーターによる試滑走を経て、試作第4弾まで改良を重ねた。また、製品化の最終候補として3パターンを製作、2020年2月13日に試作品第4弾の試滑走会を開催した結果、3年の年月をかけて製品化に成功した⁶⁰。

開発したブレードの特徴は、①燕が得意とするステンレス鋼材のためメッキの必要がなく、メッキ剥がれの心配なし、②独自のアーチ構造により、同重量の従来品より強度が増加、③左右対称形状の採用により、1本単位の購入が可能、④全体の焼き入れ後、粘り強さが必要な部分のみ焼き戻しを行い、全体の剛性と壊れにくさを両立、⑤従来品より接合部分の面積を広くし、溶接で接合することで強度アップなど、燕の職人の英知を結集させた高品質の製品となった。

研究会会長の徳吉淳氏が代表取締役を務めるのが、独自の研磨技術を有する有限会社徳吉工業である。同社は、先代がバフ研磨加工を主として創業し、以来研磨專業の加工受託に特化してきた。当初は、鍋やケトルの本体部分のバフ研磨を受託していたが、小さく複雑な形状であるハンドル金具部分の研磨へのニーズがあり、従来のバフ研磨に加え、バレル研磨加工を開始した。以降、この加工法の可能性を感じ、現在はバレル研磨加工にシフトした。

徳吉工業では、長年培ったバレル研磨技術を応用し、従来の金属加工品だけではなく、研磨加工が難しいとされている3Dプリント品の研磨も行う。また、顧客ニーズに対応し、2019年には「ドラッグフィニッシュ加工」「切削工具エッジホーニング」も開始した。同社では、徳吉社長のほか、奥様も経営に携わり、ご子息は「職人」として、研磨技術を継承している。

徳吉工業は「燕市フィギュアスケートブレード開発研究会」では、オーガナイザーに徹し、ブレードの研磨工程は、創業から45年を迎える同業他社の研磨企業「船山理研工業所」が担う。研究会発足から3年間、改良を重ねた試作品が2020年2月に完成すると、徳吉工業ではスケート事業部を新設し、「燕ブレード」の販売事業を開始した。積極果敢に研究開発や試作等に挑戦する「職人」を擁する地域中小企業は、燕地域の社会的資産であるとして

⁶⁰ 2020年2月28日付燕市役所HP (<https://www.city.tsubame.niigata.jp/kogyo/shoko/94/4169.html>) による。

もに、産業集積の根幹を形成し、集積の発展を支えている。

VI. 考察

以上、燕の産業集積を構成する中小企業において、産業の「担い手」としての「職人」が集積全体に関わり、どのような影響を与えたか、そのプロセスを確認した。前項の 2 事例を含めた燕調査からは、地域の産業集積において「職人」や「技術者」が産業発展に寄与し、産業集積を支えていることが確認できた。一例として、江戸時代から燕の地で継承された鎚起銅器の加工技術が、世界で美術工芸品として評価され、燕地域のブランドイメージを高めていることがあげられる

美術工芸家のモリス（1953）は、ジャポニズムの影響を受けたアーツ・アンド・クラフツ運動を通じ、中世の職人によるギルドや、工場制手工業の協業・分業のような芸術家や企業家の共同体形成を志向した。モリスは「職人」についてこう語る。「煉瓦工、石工といったような人々は、もし芸術が当然にあるべき本来の姿をもつものならば、これらの人々は芸術家であって、単に必要であるだけではなく、美しい、故に幸福な労働をしているのである。」

前出の玉川堂では、「企業家」である七代目玉川基行氏、そして玉川堂の技術を支える「職人」として匠長玉川達士氏（以下、達士氏）の存在がある。達士氏は、平成 14 年度伝統工芸士認定、平成 19 年に日本工芸会正会員に認定され、多数の受賞⁶¹経験を有する。幼少期から父宣夫氏の工房に出入りし、玉川堂に入社して鎚起銅器を作ることに迷いのなかった達士氏は、最年少で「にいがた県央マイスター」の称号を得て、「匠」となった。自分が満足する器作りは「未だにできない。難しい。」と笑い、すぐに木目金の鉢の加工に集中する達士氏の姿は、神々しく見えた。

網野（2003）によれば、職能民⁶²は地域の供御人または有力神社の神人などの身分を帯びており、平安時代末期から鎌倉時代にかけての鋳物師（いもじ）などの供御人は、その系譜を誇ったとされ⁶³、神聖を帯びた「芸術家」と認識されていた。一方で、中世ヨーロッパのギルドにおいて「Artisan（アルチザン）」と呼ばれていた「職人」は、いわゆる「技術者」の総称であったが、建築家や画家などの要素も併せ持っていた。前出の Veblen（1914）によれば、「自己混入（Self-Contamination）」の概念では、「職人」の技能は、資本主義により変質する。しかし、玉川堂のように「企業家」と「職人」の分業体制により、「混入（Self-Contamination）」を回避することが可能かも知れない。この不確実な時代に、「企業家」と共に、地域産業集積の発展を担い得るのは、古来より技術を継承する「職人」であろう。

⁶¹ 玉川達士氏の受賞経験は、第 59 回(平成 24 年)日本伝統工芸展、第 61 回(平成 26 年)日本伝統工芸展入選、第 43 回伝統工芸日本金工展(平成 26 年)石洞美術館賞他、多数である。

⁶² 9 世紀末菅原道真作「寒草十首」に、薬圃人、駅亭人、賃船人、釣魚人、売塩人、採樵人等、職能民の記述がある。

⁶³ 網野(2003)は、中世に番匠とともに姿を現わす鍛冶は、刀鍛冶ではなく、釘などを製作する鍛冶であったという。

また、マーシャル（1928）による「産業集積」では、小規模企業者を産業の担い手とした、有機的に繋がる共同体が前提とされ、大塚（2000）⁶⁴においても中世ギルドを想定した地域産業集積が評価され、「生産諸力のいっそう高い発展段階」である「共同体内分業」の役割に注目した。また、フランスの社会学者デュルケーム（1971）もまた、ギルドの役割を高く評価し、同業組合論⁶⁵では「職業集団のうちに見るものは、一個の道徳力である。」とした。さらに、機械的連帯から有機的連帯への社会変動モデル⁶⁶を示し、近代産業社会の原理が「有機的連携」にあり、異質性の相互依存関係が、「社会的分業」の最も重要な特性とした。

江戸時代のヤスリや煙管から始まった燕地域での研磨技術の集積は、分業体制を重視する燕地域の職人気質と相俟って、異業種との連携による「創発」、そして同業他社との「分かち合い」や「切磋琢磨」により、「フィギュアスケートブレード」という新産業を創造することとなった。伝統産業である研磨技術を始めた「職人」の技を集結することで「イノベーション」が生まれ、新しい産業が創造された先進的事例と言えよう。そして、この事業の核心となる研磨技術は、確かに次世代に継承されている。「企業家」と「職人」が互いに尊重し合いつつ企業が成長することは、燕の産業集積の持続、発展の可能性を大いに高めるだろう。

VII. おわりに～今後の課題と海外産業集積との連携可能性を探る

燕地域は、首都圏の大手企業の協力工場の集積として、長年ブラックボックス化されてきたことから、外部経済のロックイン化⁶⁷も指摘されていた。また、燕の金属ハウスウェア産業は、輸出主導型の金属洋食器産業⁶⁸とは異なり、輸出規制を含む国際貿易上の様々なリスクや為替変動によるコスト増加等を懸念し、輸出依存度を最小限とした内需型志向の産業構造であった。そのため、国内の顧客ニーズに合わせた新製品開発やイノベーション志向が強く、トップニッチとして存在している燕企業も存在する。また、生産技術向上や、設備投資、多能工化等により、新分野や新産業への展開が行えるよう、業界全体で協力することも多い。

一方で、高品質で機能的な各種金属製品を製造する燕企業には、欧米諸国のほか、ASEAN など世界各国に輸出を行っている企業も少なくない。前出の玉川堂では、海外ブランドと

⁶⁴ 大塚（2000）による。

⁶⁵ デュルケーム(1971)は、経済の重みが増大する近代社会において、同じ職種の職人が、必然的に共通する経済的利益を協力して守り追求するための「集団職業集団」こそ「不可欠」であるとした。

⁶⁶ デュルケーム(1971)は、「同質性」の機械的連帯（生産力向上、物質的満足、文明進化のための分業）、「異質性」の有機的連帯（道徳的特性により異質性を統合し社会全体の統一性を確保する新しい連帯の原理）があるとした。

⁶⁷ 藤田昌久、クルーグマン(1999)による。

⁶⁸ 燕地域の洋食器産業は、歴史的経緯から海外市場を意識しており、中小企業の海外事業展開への意欲が高い。

の連携⁶⁹を推進する等、「世界最高レベルの銅製品」としてのグローバルブランドの確立を視野に入れた海外展開戦略も行う。さらに、広く海外の顧客に伝統技術を実感してもらうために、50年以上前から、工場視察を受け入れ、オープンファクトリー化を実現している。

Saxenian (2007) は、地域クラスターの形成と生産のグローバル化に密接な関連があり、クラスター間連携や広域化、グローバル化は地域イノベーションに繋がるとした。海外の産業集積や外国企業との連携により、適切な相手先ニーズを得ることができれば、海外市場参入へのハードルは低減されるだろう。2020 年度プロジェクト採択事業の成果として、台湾桃園市と燕市の経済団体による産業連携協定覚書 (MOU) 締結を行った。燕企業曰く、日台双方の企業家の共通項は、技術革新への熱意と実直なものづくり精神⁷⁰であるという。

Horaguchi (2008) では、企業連携による「集合知」形成により「創発」が生まれるとし、福岡・根橋 (2019) では、小規模企業同士の日台企業連携⁷¹での「現場の知」の蓄積により「創発」が起きるとした。少子高齢化が進む台湾では、「技術継承」の問題が深刻化しており、特に戦後生まれで、高学歴のエンジニアは、「職人」よりも「企業家」という志向が強い。今後、燕の産業集積の担い手である「企業家」と「職人」を中心に、海外産業集積との連携を行うことで、グローバル市場での課題解決に寄与できる未来はそう遠くはないだろう。

(参考文献)

- 網野善彦 (2003) 『日本中世の百姓と職能民』 平凡社。
伊丹敬之、松島茂、橘川武郎 (1998) 『産業集積の本質-柔軟な分業・集積の条件』 有斐閣
大塚久雄 (1956) 『欧州経済史』 岩波書店。
大塚久雄 (1977) 『社会科学における人間』 岩波書店。
大塚久雄 (2000) 『共同体の基礎理論』 岩波書店。
河藤佳彦 (2012) 「産地の活性化に関する政策的考察-新潟県燕市における取組み-」 『産業研究』 (高崎経済大学産業研究所紀要) 第 47 巻第 2 号。
清成忠男 (1970) 『日本中小企業の構造変動』 新評論。
シュンペーター、J.A. (1977) 塩野谷祐一、東畑精一、中山伊知郎訳 『経済発展の理論-企業者利潤・資本・信用・利子および景気回転に関する一研究 (上) (下)』 岩波書店。
シュンペーター、J.A. (1998) 清成忠男訳 『企業家とは何か』 東洋経済新報社。
高橋美樹、根橋玲子 (2014) : 発展展望を持つ日台中小企業アライアンスの特徴, 中国産業論の帰納法的展開, 渡辺幸男, 駒形哲哉, 植田浩史編著, 同友館。
鶴見和子 (1996) 『内発的発展論の展開』 筑摩書房。

⁶⁹ LVMH グループ・クリュグ社との連携で共同開発したボトルクーラーを、世界の高級レストラン・バーに展開。

⁷⁰ 台湾には古代に金属加工の歴史が存在し、2,300 年前の「十三行文化」は、台湾先住民による金属器文化である。

⁷¹ 福岡・根橋(2019)では、日台の企業家は文化的差異があるが、歴史的経緯や経済人の尽力等により、双方がお互いの文化的特性からくる相互補完関係を「暗黙的に」理解しているとした。

- デュルケーム、E (1971) 田原音和訳『社会分業論』青木書店.
- 根橋玲子 (2020) 『燕三条の金属産業集積における内発的発展の考察～担い手としての「企業家」像から』昭和女子大学 現代ビジネス研究所紀要 (2019 年度) .
- 原田誠司 (2000) 『産業集積における創発・自己組織化のダイナミズム：燕金属加工産地の歴史個性の形成を中心に』那須大学論叢 1 巻.
- ヴェーバー、M. (1989) 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.
- ヴェーバー、M. (1904) 富永祐治、折原浩、立野 保男訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店.
- ヴェーバー、M. (2005) 浜島朗、徳永恂訳『社会学論集：方法・宗教・政治』青木書店.
- マルクス、K.H. (1959) 岡崎次郎訳『資本制生産に先行する諸形態』青木書店.
- マルクス、K.H. (1969) 向坂逸郎訳『資本論 1 -9』岩波書店.
- モリス、W. (1953) 中橋一夫訳『民衆の芸術』岩波書店.
- モリス、W. (2006) ピーターソン、W.S. 編、川端康雄訳) 『「理想の書物」—芸術は誰のためにあるか』ちくま学芸文庫.
- 渡辺幸男 (1997) 『日本機械工業の社会的分業構造・階層構造・産業集積からの下請制把握』有斐閣.
- 渡辺幸男 (2011) 『現代日本の産業集積研究-実態調査研究と論理的含意』慶應義塾大学出版会.
- 山崎充 (1977) 『日本の地場産業』ダイヤモンド社.
- 山田幸三 (2013) 『伝統産地の経営学 陶磁器産地の協働の仕組みと企業家活動』有斐閣.
- Granovetter, M (1973) *The Strength of Weak Ties*, American Journal of Sociology, Vol. 78, No. 6. (グラノヴェッター、M. (2006) 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司 (編・監訳) 『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房.
- Horaguchi, H. (2008) *Collective Knowledge and Collective Strategy: A Function of Symbiotic Knowledge for Business-University Alliances.*, WORKING PAPER SERIES No.57 2008/10/14, The Research Institute for Innovation Management, HOSEI UNIVERSITY.
- Marshall, A. (1920) Principles of Economics eighth edition, Macmillan and Co., Limited St Martin' s Street, London.
- Marshall, A. (1923) Industry and trade: A study of industrial technique and business organization, and of their influences on the conditions of various classes and nations (4th Ed.) . London: Macmillan (マーシャル、A. (2000) 永沢越郎訳『産業と商業』岩波書店) .
- Marshall, A. (1960) Principles of Economics, Ninth Ed. C. W. Guillebaud, Macmillan & Co. Ltd, (マーシャル、A. (1966) 馬場啓之助訳『経済学原理Ⅱ』東洋経済新報社)
- Penrose, E. T. (1959) *The Theory of the Growth of the Firm*, John Wiley and Sons、(ペンローズ、E (1962) 末松玄六訳『会社成長の理論』第2版、ダイヤモンド社) .

- Piore, M.J. and Sabel, C.F. (1984) “The Second Industrial Divide : Possibilities for Prosperity” Basic Books, (山之内・永易・石田訳 (1993) 『第二の産業分水嶺』筑摩書房) .
- Porter, M.E. (1990) *The Competitive Advantage of Nations*, Macmillan Inc. (ポーター、M. E. (1992) 土岐坤、中辻萬治、小野寺武夫、戸成富美子訳『国の競争優位』(上)(下) ダイヤモンド社) .
- Porter, M.E. (1998) *On Competition*, Harvard Business School Press (ポーター、M.E. (1999) 竹内弘高訳『競争戦略論Ⅱ』ダイヤモンド社) .
- Saxenian, A. (1994) . *Regional advantage: Culture and competition in Silicon Valley and Route 128*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (サクセニアン、A. (1995) 大前研一訳『現代の二都物語』講談社) .
- Saxenian, A. (2007) . *The new argonauts: Regional advantage in a global economy*. Cambridge, MA and London: Harvard University Press. (サクセニアン、A (2008) 本山康之・星野岳穂監訳『最新・経済地理学』日経 BP 社) .
- Veblen, T (1899) *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions*. New York, Macmillan. (ヴェブレン、T (1961) 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫) .
- Veblen, T (1904) *The Theory of Business Enterprise*, New Brunswick, New Jersey (ヴェブレン、T (1996) 小原敬士訳『企業の理論』勁草書房) .
- Veblen, T (1914) *The Instincts of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, New York B.W.HUEBSCH (ヴェブレン、T (1997) 松尾博訳『ヴェブレン経済的文明論：職人技本能と産業技術の発展』ミネルヴァ書房) .